古田元夫著

『ベトナム人共産主義者の民族政策史 ――革命の中のエスニシティ――』

大月書店　1991年　702ページ

白石昌也

I

ベトナム戦争期に勉学を開始した日本の東南アジア研究者たちは，今や40歳代となり，それぞれの研究を集大成する年齢に差しかかり始めている。本書の著者も，そのような世代に属する気鋭の研究者の1人である。

本書は，日本人による最初の本格的なベトナム共産主義運動史研究であるのみならず，学際的アプローチを旨とする国際関係論，地域研究の特質を反映したエスニシティ事例研究でもある。

本書の構成は次のとおりである。

はじめに……本書の課題と方法――

序　論　ベトナム人の伝統的「南国」意識とフランス領インドシナの出現

第Ⅰ部　国際主義の時代（1925～1939）

第Ⅱ部　独立が現実となった時代（1939～1945）

第Ⅲ部　独立が輝いていた時代（1945～1954）

第Ⅳ部　国民国家の時代から「国際化」の時代へ

本書の結論

序論および各部は，さらに要旨と幾つかの章より構成されている。章の数は全部で20，節は「はじめに」の部分をも含めると総計90，A5判で700ページにおよぶ大著である。

II

本書の基本的視点は，「はじめに」および「本書の結論」の部分に集約されている。ベトナム政治史研究を続けてきた著者にとって，大きな転機となったのは，1979年1月のベトナム軍カンボジア進攻であったという。それを契機として，ベトナム人にとって「インドシナ」とは何なのかを，本格的に考え始めるようになった著者は，「エスニシティ」そして「地域」という分析枠組を通して，「ベトナム史の実像」に迫ることを心がけてきた。

そこで著者が強調していることは，「エスニシティ」，「民族」，「地域」を，歴史的に固定されたものとして捉えるのではなく，歴史的諸条件によって規定されつつも，常に新たに「発見」され続ける変形可能な概念的枠組と見做す視点である。そのような認識を出発点として，著者は多「民族」国家としてのベトナムにおける「うち」と「そと」の関係を，重層的・複合的かつ相互規定的な関係として把握する。それゆえ，ベトナム内部における少数民族問題はもとより，ラオス，カンボジアとの関係（インドシナ地域問題）も，ベトナムの置かれた立場と外部世界（伝統的東アジア世界，インドシナ，国際共産主義運動，全世界，東南アジアなど）に対する認識枠組との相関関係において，常に可変的であり続けるとする。

とりわけ，「国民国家」の時代にあっては，それぞれの集団が自分たちをどのような国家＝「国民」共同体として国際社会の中に登録するのかによって，「民族」の意味・内容も異なってくる。ベトナムが歩んできた現代の歴史もまた，「われわれとは何か」を模索し，それに実践的な定義を与える過程に他ならない。さらにまた，「われわれ」のアイデンティティーの模索においては，「うち」と「そと」の境界の識別，そして両者間の関係の設定が，相互に規定し合う問題として，不断に提起され解決を求められる。

III

植民地化以前のベトナムにおいて「うち」なる人々とは，一義的に狭義のベトナム人，すなわちキン族の集団に他ならなかった。彼らにとって「そと」の世界とは，まず第1に中華帝国であり，第2に周辺の諸民族であった。

序論第1章で著者は，中国からの政治的独立と，西

方および南方の諸民族に対する経略という2つの動きを軸として形成された，キン族の伝統的対外認識の枠組を提示する。15世紀頃に記述された建国神話の構造的分析や，周辺諸民族の中でも中越国境地帯の北方諸民族と，「南進」ルートに位置したチャム族やクメール族，そして「西方関与」の対象たる西方諸民族への対応に相違があるとの指摘などは，示唆に富む。

次いで植民地時代を迎えると，「そと」の世界として，明治維新以降の日本や辛亥革命前後の中国，そして，インドシナに隣接するシャム（タイ）が，キン族知識人・ナショナリストの視野に入ることとなる。他方，植民地支配者によって新たな地域単位「フランス領インドシナ」が設定されたことは，「うち」と「そと」の認識枠組を流動化させるひとつの契機となった。

序論第2章は，フランス植民地支配初期において，キン族知識人たちが「インドシナ」なる枠組にどのように対応したのかを手際よく整理している。しかも，植民地時代に普及したクオックグー（ローマ字表記された書き言葉としてのベトナム語）が，キン族の共同性を強化する役割を果たしたために，「クオックグー・ナショナリズム」がインドシナ全体を包括するものとはなり得なかったことが指摘される。以上の分析においては，従来「傀儡」分子としてあまり顧みられることのなかった親仏的知識人の言論にも，十分な目配りがなされている。さらに本章の末尾では，近代ベトナム民族運動と外部世界の接触地点として，シャムが重要な意味を持ち始めたことが説得的に叙述される。

Ⅳ

第Ⅰ部以下は，本書の核心部分であり，そこでは，1920年代以降のベトナム共産主義者による「うち」と「そと」の認識の変遷が詳細に記述される。

第Ⅰ部は，ベトナム青年革命同志会結成（1925年）前後から第2次世界大戦勃発（39年）までの時期を扱っている。そこでの主要なテーマは，民族的契機を出発点としてベトナム「国民革命」と「世界革命」の結合を追求しようとしたグエン・アイ・クオク (Nguyen Ai Quoc) から，階級的団結を重視する「インドシナ革命」を模索した「国際主義者」への主導権の移転と，それに伴う革命運動の態様の変化である。

従来の欧米における研究では，1930年代，とりわけその前半のベトナム共産主義運動を，否定的に評価する傾向が強かった。これに対して，著者は次のように指摘する。確かに，「国際主義者」たちの主張は観念的にすぎたかも知れないが，革命を展開する場として「インドシナ」を設定したことは，キン族以外の周辺諸民族に対する工作という新たな課題を提起することとなった。そして，そのことは，多民族国家の意味を問いかける契機となった。

ベトナムの共産主義運動は，1930～31年の高揚の後，当局による徹底した弾圧によって壊滅状態に陥った。このために，国内での組織再建工作は，国外の拠点から開始された。その文脈において著者は，とりわけタイ在住越僑の間でのベトナム人共産主義者の運動に着目する。そして，それとの関連で，タイと陸路で結ばれた中部ゲティン地方が，ベトナム国内での運動の中心的拠点となったと指摘する。さらに，今ひとつの海外拠点たる南中国との中継・媒介の役割を期待されたのが，国内の華僑などであった。

第Ⅱ部は，第2次大戦から1945年8月革命までの時期を扱った部分である。この時期には，ベトナム，ラオス，カンボジアがそれぞれ別個に独立するとの民族解放革命の枠組が提起され，同時にそれら3国間での「国民の連帯」（インドシナ・レベルでの連邦構想）が志向された。他方，国民国家の枠組に包摂されることとなった少数民族に関しては，民族自決権が否定される一方で，諸民族間の平等原則が強調された。

著者の指摘の中で，特に注目をひくのは以下の諸点である。日本軍による「独立」付与が，結果として，その後のインドシナ3国の分離独立を補強することになったこと。国内華僑に関しては，ベトナム民族革命の構成者としてよりも，中国との「友好の絆」としての役割が重視されたこと。1945年8月の革命体験の共有が，少数民族を含む広範な人々の間に，ベトナム「国民」としての自覚を促したこと。山岳民族工作においては，草の根活動家が階級的契機を重視したのに対して，中央派遣幹部が伝統的上層階層との同盟を重視したことなどである。

第Ⅲ部は，8月革命から第1次インドシナ戦争終了

(1954年) までの時期を扱っている。共通の敵フランスとの戦いの中で，ラオス，カンボジアの軍事戦略的重要性が認識され，軍事的動員による国内移動やラオス，カンボジアへの越境工作によって，少数民族を含めたベトナム人の間に，インドシナ諸民族を「戦場の友」とする共時的体験が生じた。しかし，国民国家レベルでは，中国革命の成功 (1949年) 頃より，ベトナムとカンボジア，ラオスでの革命を分離する認識が明確となり，52年のインドシナ共産党第2回大会で，3国革命政党の分立が正式決定される。これは，ベトナム革命の課題が民族闘争から階級闘争 (土地改革) に移行する中で，依然民族解放革命の段階にあると判断された他の2国と歩調が合わなくなったことへの対応でもあった。他方，この間に，ベトナム領内では階級闘争重視路線の採用の過程で，少数民族に対する「下からの大衆動員」と「上層階級との同盟」の2つの方針が，複雑な対抗関係を織り成すこととなる。また，華僑に対しては，ベトナム公民としての漸次的統合の方針と，人民中国との関係における「絆」＝友好的外国人としての優遇方針が並存し，将来に問題を残すこととなった。

第Ⅳ部は，1954年から89年までの時期を扱っている。この時期には，国土の南北への分断 (1954～76年)，ベトナム戦争 (60～75年)，南北統一 (76年)，中越対立とカンボジア紛争 (78年以降)，刷新路線の開始 (86年以降) など，ベトナムを取り巻く内外の情勢が，目まぐるしく変化した。この時期を，著者は，ベトナムが世界の革命運動の「辺境」に位置すると認識していた第1期 (1960年代半ば以前)，その「焦点」となっているとの自覚を持った第2期 (78年頃まで)，そして「国際化」の進展の中で新たな模索を開始した第3期 (70年代末～89年) に分ける。

少数民族に関して言えば，第1期においては平等が強調されて自治区が設置されたが，第2期になると抗米闘争の必要性から，キン族を「主軸民族」とする団結が強調され，自治区の機能も形骸化し，やがて廃止されるに至る。そして，第3期になると，ベトナムの「多元性」に対する関心が強まり，かつ諸民族のルーツとしての東南アジア的性格が強調されるようになる。

華僑に関して言えば，第1期には人民中国との「友好の絆」としての側面が重視されたが，第2期になると，文化大革命期の中国側の強引な華僑工作に対する反発を契機として，華僑をベトナム内部の問題として処理する傾向が顕著となる。そして，その延長上に，1975年以降の「華僑問題」とボート・ピープルが生じた。しかし，第3期になると，華僑は国際化の中で，中国から東南アジアにかけて展開する華人世界の人的絆として，再度着目されることとなる。

ラオス，カンボジアに関して言えば，第1期においては，それぞれの王国との国家間関係が重視されたが，第2期になると，「単一の戦場」としてのインドシナでの共闘対象として，2国における革命闘争を支援する姿勢が顕著となる。そして，第3期には，インドシナを自己完結的な地域として捉えるよりも，東南アジアのサブ地域として認識する傾向が強くなる。

V

このようにして，ベトナム人のアイデンティティーは，伝統的なキン族共同体としてのそれから，1930年代のインドシナ革命志向の時代をくぐり抜けて，多民族国家としてのベトナムへと至る。さらに，インドシナという枠組に関しては，伝統的な華夷認識から，1930年代の階級的連帯の場へと移り，さらに第2次大戦後は，国民国家同士の連携から，戦闘的同盟＝運命共同体へ，そして，最後には東南アジアという上位の地域枠組の中での相対化された関係へと移行した，と著者は総括する。

ベトナムの歴史を，周辺諸民族，華僑，そしてカンボジア，ラオスとの係わりという3次元の側面で整理し，さらには中国やシャム (タイ) との係わりをも視野に入れた本書は，まさに圧巻である。ここに展開されている議論は詳細であり，かつ多岐にわたる。本書を全面的・体系的に論評することは，ほとんど不可能である。したがって，以下では，幾つかの点について若干の私見を陳述するに留めたい。

まず第1点として，本書では，キン族の自己認識をもっぱら他者との係わりにおいて記述することに焦点が置かれているために，そもそもキン族をキン族たらしめている共同性とは何なのか，という内面的側面の

追求が，若干希薄となったとの感を抱く。この問題を追求するためには，著者も結論部分で指摘しているように，1930年代以降の同時代を生きた共産主義者以外のベトナム人の言動にも，今後目配りをしてゆくことが必要となるであろう。また，「南進」の過程で，キン族の居住空間が拡大していったことが，そのような共同性に，どのような変形や修正を促したのかという問題を，検討することも必要となるであろう。

また，ベトナム国内の少数民族として，本書でもっぱら扱われているのはベトナム北部の山岳民族と華僑であって，中部山岳民族やチャム，クメールなどについてはあまり言及されていない。これら諸民族に関する研究をも付加すれば，さらに立体的な構図を描くことができるであろう。

第2点としては，インドシナという地域枠組は，未成熟なままいったん頓挫した形となっているが，今後，(従来とは形を変えたものとなるにせよ）再びインドシナ地域主義が強調される時期がくる可能性は全くないのであろうか。この問題に答えるためには，1980年代前半までのインドシナ同盟関係がなぜ挫折したのか，本当に挫折したのかを，今一度角度を変えて検証する必要があるように思われる。これと関連して，著者自身も指摘しているところではあるが，ベトナム側の視点のみならず，ラオス，カンボジア側からの視点をも，検討することが必要であろう。さらにまた，将来のインドシナ地域構想においては，タイや中国（特に西南諸省や華南地域）を除外することはできないであろうから，これら2国の対インドシナ政策をも，歴史的に通観する作業が不可欠となるであろう。

なお，インドシナという地域枠組に関しては，20世紀初頭の時期の分析が若干形式的であると思われる。すなわち，行政的枠組としての仏領インドシナ連邦の樹立が，直ちにインドシナ「巡礼圏」の成立を意味したわけではない。ファン・ボイ・チャウ (Phan Boi Chau) の世代は，そのようないわば「はざま」の時代に生きた世代であった。植民地「巡礼圏」がいまだ形成されていなかったにもかかわらず，なぜ彼らは「インドシナ」を将来の独立国家の版図として想念し得たのか。このような問いかけは，アンダーソン (B. Anderson) の「想像の共同体」論に対する批判的視点の設定にもつながるはずである。

第3点として，1980年代末以降のベトナムにおいては，東南アジアという地域概念を相対化するような新たな議論も展開されているように思われる。そのひとつは，ベトナムが東南アジアと東アジアの2つの接点に位置し，両者の架け橋としての役割を果たし得るという議論である。今ひとつは，ベトナムを東南アジアの1国として位置づけるよりも，むしろアジア・太平洋という広い地域の中で位置づけようとする議論である。これらの論調は，前項に指摘したところのインドシナ地域主義復活の可能性とは，ベクトルの方向を逆にしつつも，東南アジアという地域枠組が，必ずしもベトナムにとっての唯一の選択肢ではないかも知れないことを，暗示しているように思われる。

本書の記述が1989年の時点で終わっているために，最近のこのような兆候を射程に入れていないのは当然のことではあるが，今後このような視点から，歴史を振り返ることも必要となるかも知れない。

第4点として，1980年代までのベトナム共産党の公式の世界認識＝3革命潮流論の分析と，それが刷新政策の展開の中でどのように変遷しつつあるのかという検討は，ベトナムにとっての世界と地域の問題を検討する際にも必要であると思われる。

また，植民地時代における「そと」の世界として，圧倒的な意味を持ったのはフランスであった。フランスの植民地支配は，ベトナム人の内面世界にも多大な影響を与えたはずであり，従来の植民地支配対抵抗という平板な図式では解決できないさまざまな問題が存在すると思われる。総じて，インドシナという地域枠組を越えた外部世界との連関を，今後研究作業の一環として追究されることを期待したい。

以上に指摘した諸点は，著者に対する批判というよりも，むしろ，今後の研究に対する要望といったものである。また，本書をまとめるにあたって，著者が意識的に切り捨てた問題も多々あることであろう。いずれにせよ，著者が切り拓いた地平は広く高く，日本そして世界のベトナム現代史研究の水準を一挙に高めたことは疑いない。

（横浜市立大学教授）